

歴史を語る建物たち

最終回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

鶴岡カトリック教会（鶴岡市）



鶴岡市の中心部、鶴岡公園から東へ200mほど進んだところに、白色が鮮やかな木造の教会がある。

明治36年に建築された鶴岡カトリック教会で、昭和54年に国の重要文化財に指定された。

パーフェクトな造り

明治19年に布教のため鶴岡を訪れたダリベル神父は、翌20年に民家を借りて教会とした。しかし、祈りの儀式などには手狭なことから、当時売りに出していた元庄内藩家老・末松十蔵の屋敷跡を、地元信者らの協力を得て購入し、新たな教会の建設に着手した。

しかし、資金が不足していたため、ダリベル神父は私財を投じるとともに、故郷・フランスの友人や知人に募金の手紙を書くことが「日課」となった。

一方、建設を請け負った棟梁・相馬富太郎も、初めて手がける洋風建築に戸惑いを隠せないでいた。

相馬は上京して神田や浅草などの教会をつぶさに見学し、建築技師の資格を持つ設計者のパピノ神父にも直接指導を仰ぎながら、明治35年6月に工事を始めた。

防腐剤がない時代だったので、基礎工事には大量の硫黄を使って防腐剤代わりとするなど随所に工夫を凝らした。そして、工事の途中で問題が発生すると、相馬は自ら上京して解決に努めた。道路や鉄道が未発達だった当時、鶴岡から東京に行くには約3週間かかったといわれることから、相馬がいかに教会の建設に心血を注いでいたかが分かる。



昭和初期の鶴岡カトリック教会。尖塔は鶴岡市内で最も高い建物であった。資料：天主堂を仰ぎ見て（鶴岡カトリック教会）

こうして、明治36年10月、建坪約200平方メートル、23.7メートルの尖塔を持つ壮大な教会が完成した。教会は設計図通りに極めて精巧に造られており、現在、鶴岡カトリック教会の司祭を務めるウイリアム・ドネガン神父は、「パーフェクト！今も相馬さんが生きていたらお会いしたいくらいです」と、その高い完成度に驚嘆する。

黒いマリア像の謎

鶴岡カトリック教会には、日本で唯一といわれる黒いマリア像が安置されている。そして、観光客のほとんどがその理由を知りたいがるという。当然筆者もその疑問をドネガン神父に投げかけた。

ドネガン神父は語る。「教会の建設と並行して、ダリベル神父は祭壇に置く聖母マリア像を、故郷のフランス・ノルマンディ地方に注文しました。しかし、送られてきた石こう像は船便でひどく破損していました。そこで、今度は木製像を頼んだところ、黒いマリア像が送られてきました。実は、この像はノルマンディの教会で実際に使われていたものでした。ではなぜ黒いマリア像なのか。それにはいろいろな説がありますが、一つは、ノルマンディだけでなくヨーロッパ全土でコレラがまん延していたころ、偶然地中から掘り出された黒いマリア像を持って、土地の人が町中を行列したところ、コレラがピタリとやんだというものです。ただ、マリア像ははじめから黒かったわけではなく、地中に埋もれている間に黒く変色したとも考えられています。したがって、ノルマンディ地方は今でも黒いマリア像が置かれた教会が多いのです」

ダリベル神父がノルマンディ出身だったからこそ、遠い異国の地にやってきた黒いマリア像。なんとも不思議な縁である。

生きた“教材”

黒いマリア像は、平成19年に東北芸術工科大学によって修復作業が行われた。最新の医療器具を用いて行われた作業は、実に1年以上の歳月を要した。そして、マリア像が教会に戻された際には、教会を教室にして、同大の教員が学生に講義を行った。

珍しいのは黒いマリア像だけではない。一見ステンドグラスに見える教会の窓絵は、通称「貼り絵」といわれる特殊なものである。貼り絵にはいくつか種類があるが、鶴岡カトリック教会の窓絵は、薄い透明な紙に描かれた聖画を2枚のガラスで挟んで作られている。高価なステンドグラスに代わるものといわれているが、この種の窓絵も非常に高度な技術が必要で、日本で現存するのはここだけである。

また、教会の床には畳が敷かれている。かつての日本では畳敷きの教会も多かったようだが、改築などで大半が板張りに変えられる中、今では貴重な存在となっている。

さらに、平成5年度から7年度にかけて、老朽化を理由に大規模な補修工事が行われたが、その工事過程においても、建築学的に重要な事実が次々と明らかになった。そのため、今日でも、大学などの研究者や卒業研究の大学生らの調査訪問が絶えない。

ドネガン神父は、「ここに調査研究に来られた人たちがいろいろなことを教えてくれるので、私も大変勉強になっています」と前置きした上で、「実は私があなた（筆者）にお話ししたことも、多くは研究者などに教えてもらったことなのです」と笑う。

最高のコンサートホール

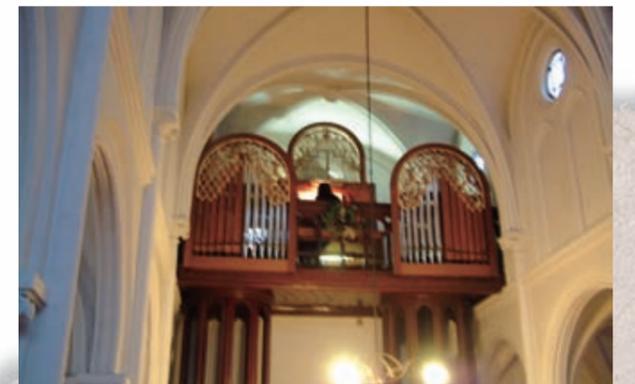
鶴岡カトリック教会が国重要文化財に指定される前の昭和50年、東京純心女子短期大学（現・東京純心女子大学）教授で高名な声楽家でもあった金内馨子（故人）は、当時のビッファー神父に請われて、酒田市でのコンサートの帰りに教会でチャリティー音楽会を開催した。補修費用調達のために行われた、教会内での初めてのコンサートであった。「天主堂コンサート」と名付けられた音楽会は、当初の目的からは変わりつつも、今日まで続いている。

その他、さまざまな楽器や声楽によるコンサートが年間10回ほど行われる。ドネガン神父によれば、教会の高い天井と、床に敷かれた畳のバランスによって、非常に良い音質を保つことができるという。

もともと、教会内には空調設備がないので、冬のコンサートは難しい。皮肉にもヒーターの音まで響いてしまうからだ。そこで、コンサート前にヒーターを全開にして教会内を暑くし、室温が下がらないうちにコンサートを行ったというエピソードも残る。

なお、平成20年に赴任したドネガン神父だが、昭和59年～平成2年にもこの教会に赴任しており、鶴岡は2度目である。最近うれしかったことは、最初の赴任時に教会の幼稚園の園児だった子どもの結婚式を、自らの司式でこの教会で行ったことだという。

鶴岡を愛し、教会を愛するドネガン神父によって、100年以上この地で続いてきた祈りの儀式が、今週も静かに執り行われる。（フィデア総合研究所 研究員・山口泰史）



練習中だろうか。誰もいない教会には女性が演奏するパイプオルガンの音色が美しく響き渡っていた（筆者撮影）。